学　校　研　究

小 学 校

加納岩小 …… 5
日下部小 …… 7
後屋敷小 …… 9
日川小 …… 11
山梨小 …… 13
八幡小 …… 15
岩手小 …… 17
笛川小 …… 19
塩山南小 …… 21
塩山北小 …… 23
奥野田小 …… 25
大藤小 …… 27
神金小 …… 29
玉宮小 …… 31
松里小 …… 33
井尻小 …… 35
勝沼小 …… 37
祝 小 …… 39
東雲小 …… 41
菱山小 …… 43
大和小 …… 45

加納岩小学校

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けて
～　「かのスタ」の充実　～

Ⅰ　研究内容及び方法

1　「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」に向けた授業改善

・「課題の設定」→「情報の収集」→「整理・分析」→「まとめ」→「発表」（高橋2021）を意識した学習過程を設定する
・端末とクラウド環境を活用し児童に本時の学習活動の見通しをもたせる
・「個の取り組み」「他者参照」「話し合い」など、それぞれの学び方を児童が選択できる「複線型」の場面をつくる
・授業の終末で、本時の振り返りを個々で行わせる
・授業づくりの３つの視点をもつ
①児童が一番忙しいか（学習者主体）
②児童が選択する場面があるか（個別最適な学び）
③児童同士が協働的に関わっているか（協働的な学び）

2　個別最適な学び・協働的な学びを支える環境づくり

・学級力向上プロジェクトの実施、「きずなの日」の充実による、親和的な学級集団づくり
・協働的な学びを実現するため、教師の発話分析をもとにした、学習ファシリテートの充実
・学びの個別化・個性化を目指したAIドリルの活用推進

3　「かのスタ」の充実

学習の基礎基本の定着をベースに、総合的な学習の時間の指導要領解説に示される「考えるための 10 の技法」といったスキルの獲得をはじめとした情報活用能力の育成に向け取り組む。

・情報活用能力育成に向けた、「GIGAワークブックやまなし」の活用推進
・「考えるための10の技法」の獲得を目指した、取組の実施
・思考力・判断力・表現力の育成を目指した、各種スキルの獲得

Ⅱ　成果と課題

1　今年度の形式（研究授業不実施 実践共有型）の成果

・心理的・時間的負担の軽減：研究授業の準備に伴う負担が減り、日常の授業改善にフラットな気持ちで挑戦できた。
・実践例の豊富さと即効性：多様な学年・教科の実践をスプレッドシート等で共有したことで、明日から使える具体的なスキルや思考ツールの活用法を多く学べた。

・当事者意識の向上：特定の誰かの研究授業を観るのではなく、全員が「一人一実践」を交流することで、全教員が主体的に研究に向き合えた。
・系統的な指導の実現：他学年の実践を知ることで、自学年で育てるべき能力を逆算して授業構成に反映させることができた。

2　課題と「研究授業」への期待

・子どもの姿を通した検証：1時間の授業の中での効果的な活用法や、子どもの具体的な反応・変容を学ぶには、やはり実際の授業参観が必要であるという意見。
・若手教員のニーズ：授業の組み立て、発問、児童への関わり方など、経験の浅い教員にとっては「直接見る」ことによる学びが欠かせない。
・「かのスタ」の具体化：重点テーマである「かのスタ」の30分間の有効な使い方について、まだイメージを固めきれていない層がいる。

3　来年度に向けた方向性

・継続の希望：実践共有のメリットが大きいため、来年度も現在の方向性をベースにすることを支持する声が多い。
・新しい研究授業の形：負担の重い従来型ではなく、日常的に見せ合い対話できる「心理的安全性の高い授業公開」や、今年度の研究を生かした提案授業の実施を模索する。
・最新情報の提供：研究主任による教育情勢の共有は、授業改善の指針として引き続き期待されている。

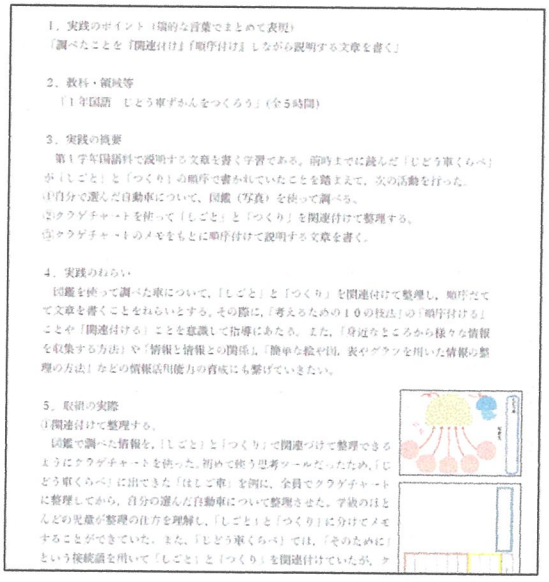
Ⅲ　成果物

1　授業実践事例共有プラットフォーム
2　加納岩小版 ICT活用スキル系統表
3　加納岩小　情報活用能力育成　年間指導計画
4　情報活用能力等の育成を図った実践事例集

令和８年度　加納岩小　情報活用能力等育成　年間指導計画　３学年

		4	5	6	7	8	9	10	11
国語	単元学習内容	どきん	もっと知りたい、友だちのこと	まいごのかぎ	本で知ったことをクイズにしよう		ローマ字	ちいちゃんのかげおくり	すがたをかえる大豆
	タブレットの活用	音読を録音し、工夫の共有	伝えたいことを絵描し、発表練習	意味調べ	スライド等を使って、まとめたことについてクイズを作成する。		キーボードを使ってタイピング	言葉調べ	音読調べ すがたをかえる食べ物を調べる
社会	単元学習内容	まちの様子	市の様子	店ではたらく人と仕事	店ではたらく人と仕事		工場ではたらく人と仕事	火事からまちを守る	事故や事件からまちを守る
	タブレットの活用	グーグルアース・グーグルマップで検索						消防署、警察署と 地域の設備、写真撮影 学んだことを作業にまとめて掲載	
算数	単元学習内容	時こくと時間のもとめ方を考えよう	大きい数の筆算を考えよう	長い長さをはかって表そう	記録を整理して調べよう		10000より大きい数を調べよう	大きい数のかけ算のしかたを考えよう	数の表し方やしくみを調べよう
	タブレットの活用	デジタル教科書の時計を活用	デジタル教科書の図形を書き活用し、筆算の仕組みや理解する 数カードを使って、いろいろな筆算をつくる	地図アプリを活用し、長い長さのイメージをつかむ	表、グラフツールを使って棒グラフを作成 身近なものを表やグラフを用いた情報の整理の方法		10倍した数と10分の1にした数をデジタル教科書のお金ツールで考える		身の回りの小数量記を撮影し、慣れ方を考える（導入） 学習進度などの基本操作
理科	単元学習内容	春の生き物	たねまきチョウのかんさつ	どれくらい育ったかな風やゴムのはたらき	花がさいたよ私の研究		実ができたよこん虫のかんさつ	太陽とかげ太陽の光	雲のせいしつ
	タブレットの活用			植物の成長記録 単元終了後振返り	植物（花）の観察記録 自然や天気に関連サイトなど		「花と実」の観察記録を撮影する。自分が育てたことをふり返り自然の成長に着目できるようにする。	鏡で反射した日光の様子を記録	転倒でたたいたものの強さを確定する 本単元終了後振り返る

加納岩小 情報活用能力育成 年間指導計画


1．実践のポイント（端的な言葉でまとめて表現）
「調べたことを『関連付け』『順序付け』しながら説明する文章を書く」

2．教科・領域等
「1年国語　じどう車ずかんをつくろう」（全5時間）

3．実践の概要
第1学年国語科で説明する文章を書く学習である。前時までに読んだ「じどう車くらべ」が「しごと」と「つくり」の順序で書かれていたことを踏まえて、次の活動を行った。
①自分で選んだ自動車について、図鑑（写真）を使って調べる。
②クラゲチャートを使って「しごと」と「つくり」を関連付けて整理する。
③クラゲチャートのメモをもとに順序付けて説明する文章を書く。

4．実践のねらい
図鑑を使って調べた車について、「しごと」と「つくり」を関連付けて整理し、順序だてて文章を書くことをねらいとする。その際に、『考えるための10の技法』の「順序付ける」ことや「関連付ける」ことを意識して指導にあたる。また、「身近なところから様々な情報を収集する方法」や「情報と情報との関係」、「簡単な絵や図、表やグラフを用いた情報の整理の方法」などの情報活用能力の育成にも繋げていきたい。

5．取組の実際
①関連付けて整理する。
図鑑で調べた情報を、「しごと」と「つくり」で関連づけて整理できるようにクラゲチャートを使った。初めて使う思考ツールだったため、「じどう車くらべ」に出てきた「はしご車」を例に、全員でクラゲチャートに整理してから、自分の選んだ自動車について整理させた。学級のほとんどの児童が整理の仕方を理解し、「しごと」と「つくり」に分けてメモすることができていた。また、「じどう車くらべ」では、「そのために」という接続語を用いて「しごと」と「つくり」を関連付けていたが、ク

実践事例集の一部

（研究主任　古屋　達朗）

日下部小学校

研究主題

学び続ける児童の育成(2年次)
～子どもたちが学びの主体となる授業づくり～

Ⅰ　研究の内容

1　研究の方法

今年度は、「初任者研修授業研修会」の該当校になり、峡東地域の初任者の研修のために授業を提供することとなった。そこで、学校全体で同じような授業づくり・実践上の工夫をしていくことを年度当初に校内で確認をした。研究の内容としては、昨年度の研究テーマである「学び続ける児童」の育成につながった「子どもが主体となる学び方の工夫」を中心に、各ブロックでの研究をすすめてきた。

○低学年ブロックは、「学習形態の工夫」

→昨年度の「わいわいタイム」・「試しの会」など設定した学習形態で進める学び

○中学年ブロックでは、「学び方の選択」

→学び方の選択肢を与え、自分で決めて進める学び

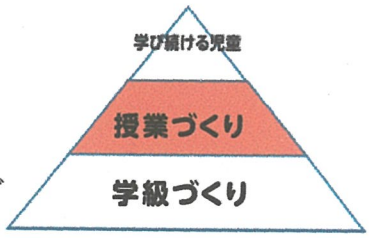
○高学年ブロックでは、「学びのサイクル」

→「つかむ・見通す・取り組む・つなげる・広げる」のサイクルの中で、自分の状況を理解し、学び方を選択し進める学び

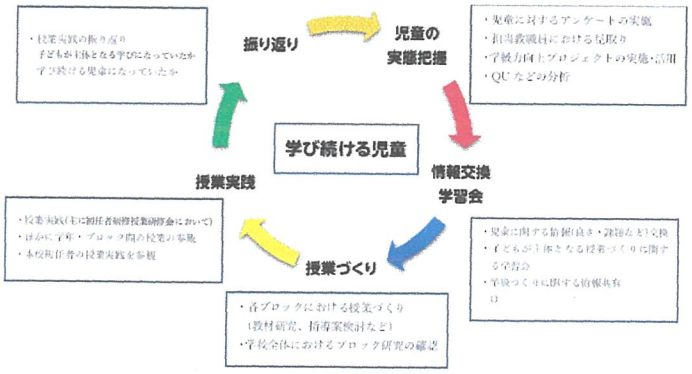
上記のような発達段階に応じた学び方の工夫をした授業づくりを行うことで、日下部小学校全体で「学び続ける児童」の育成につながっていくと考えられる。また、「学び続ける児童」の育成には、学級における人間関係(子どもと子ども、子どもと教職員)における支持的風土・共感的関係性が重要であるため、学級づくりにも力を入れていく。具体的な研究の取組みとして以下のことを行う。

(1)授業づくり

・子どもたちが学びの主体となる授業の工夫
(学習形態の工夫・学び方の工夫・学びのサイクルの活用)
→話し合い活動の設定、ICT 活用、複線型授業、外部人材の活用など



(2)学級づくり
・学級力向上プロジェクトや QU の活用
・朝の会、帰りの会、学活、など様々な場面で関係づくりができる場面の設定・情報共有(OJT)
・様々な職員による日々の学習面や生活面での子どもたちの関係性の見取り



2　実践内容

（１）学び続ける児童の育成に向けた授業づくり

低・中・高の３ブロックに分かれて、学び続ける児童の育成に向けた実践や教材研究などを行う。

○低学年ブロック

研究授業　　２年生　生活科　「作って　ためして」

指導者　　２年１組 三枝 清美　教諭

２年2組 柏原 有衣　教諭（T1）・岡部 志保　教諭（T2）

２年3組 萩原 拓也　教諭（T1）・新海小緒里　教諭（T2）

○中学年ブロック

研究授業　　３年生　道徳　「金色の魚」　　指導者：鶴田　真紀子　教諭

○高学年ブロック

研究授業　　６年生　社会科　「戦争と人々のくらし」指導者：佐久間　剛　　教諭

※研究授業については、すべて初任者研修授業実習校の提供授業となっている。

（２）学習会

「子どもたちが主体となる授業づくり」

講　師：山梨県総合教育センター　志村　貴美子　主幹・指導主事

Ⅱ　成果と課題

１　成果

○「子どもたちが学びの主体となる授業づくり」は今後も大切な視点になる。二年次ではあったが、児童の実態も変化していくからこそ、主体的な学びの中で学び続ける児童の育成というテーマがよかった。次年度も引き続き深めていくことが大切である。

○初任者研修授業実習校を主として研究を進めてきたので、「初任者でもできる授業」を意識しながら研究を進めることができた。あわせて、その研究授業を校内で参観しあうことで、全校として学び続ける児童の育成という視点を持つことができた。

○今年度もブロック研究ということで、それぞれのブロックで趣向を凝らして研究授業を作ったり、研究会を運営したりできたのでよかった。

○指導主事を招聘した学習会を行ったことで、「子供主体の授業づくり」について、共通確認ができた。

２　課題・意見

▲初任者研修授業実習校に提供する研究授業が主となってしまったため、研究が授業研究のみに終始してしまった。ブロックとしての研究の基本計画をもう少し丁寧に行うことで、研究を深める必要があった。また、人数の関係で初任者研修授業実習校の研究授業後の研究会に参加できない職員がいた。研究授業の翌週には、ブロックでの振り返りの時間も確保したが、指導主事の指導内容や初任者の研究会の様子などを、十分に共有することができなかった。

◇今年度はそれぞれのブロックごと授業研究を行い、３回の研究授業があった。来年度の研究はどのように行うか、主体的な学びの手立てなども仮説を立てて研究の主題を焦点化した方がよいのではないか。　　（研究主任　　橋本　耀太）

後屋敷小学校

主体的に学ぶ子の育成
～学びを支える学級づくり～

Ⅰ　主題設定の理由

今年度の研究内容を探る中で、現在の本校の実態に合わせた研究テーマを話し合った。学習の基盤となる「学級づくり」の研究を行いたいという意見がほとんどであった。本校の児童・保護者は年々考え方が多様化していると痛感している。その多様化した考えを持った児童をまとめ、学習を進める事への困難さを感じる教員が多い。授業を行う上で「学級づくり」はきわめて重要な要件となる。良い授業が行われる場合は、その前提として良い学級づくりが必要と言える。教員の経験年数、児童の実態がそれぞれ違う中ではあるが、「学級づくり」というテーマで研究をしたいという思いは共通していた。

また、山梨県学校教育指導指針において、学級経営の充実が示されている。具体的には、「教師と児童との信頼関係及び児童生徒相互のよりよい人間関係を育てる土台となる学級・学年等の集団づくりに取り組む。」「児童生徒が所属感、自己肯定感、自己有用感を持つことができるよう、集団・個人として課題解決に向けた目標や方法・内容等をまとめたり、決定したりする活動を行い、一人ひとりのよさや可能性を生かすよう取り組む。」とある。

「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、子供たちの主体的で自治的な取り組みが不可欠である。本校の実態に合わせ、まずは学級づくりを研究し、学級経営が充実することが、主体的に学ぶ児童の育成へとつながると考え、主題・副題を設定した。

Ⅱ　研究内容

1　一人一人がテーマを決め自主研修を行う
2　WEBQUを学級づくりに生かす
3　ICT端末の活用を促進する
4　学級経営に関する学習会
5　全国学力調査の結果分析
6　教育課程説明会の環流報告

Ⅲ　研究の具体的な取り組み

1　一人一人がテーマを決め自主研修を行う

・各人のテーマに合わせて、研修を受けたり、書籍から学んだりした。
・各人の研修の報告・交流を行った。

2　WEBQUを学級づくりに生かす

・WEBQUを実施した。

・結果を分析し、それぞれの学級づくりに生かした。

3　ICT端末の活用を促進する

・ICT端末の活用実践について研修会への参加を呼びかけ学びを深めた。

4　学級経営に関する学習会

・講師を招き「子供にとって居場所となれる学級」をテーマに学習会を行った。

・学級づくりの向上をめざす実践講座で、学んだことをそれぞれの学級づくりに活かした。

5　全国学力調査の結果分析

・今年度正解が低かった問題を分析し、どのような内容を定着させる必要があるのかを確認した。

6　教育課程説明会の環流報告

・還流報告により、全職員で共通理解を計った。

Ⅳ　成果と課題

1　成果

○子供たちが安心して学ぶための土台となる学級づくりについて、夏季学習会やグループでの交流会を行うことで学級づくりの根底の部分を改めて学び直すことができた。

○学級の実態も、教員のライフスタイルや価値観が違う中、一人一人がテーマをもって研究を行う方法は、個々の強みを活かしたり、興味を深めたりすることにつながった。また自分事として研究を行い、研究テーマに即した研修を自主的に受けることができた。

○夏季学習会では、講師を招聘し学級経営について学んだ。すぐに活かせる具体的な実践を学んだので、２学期の学級づくりに活かすことができた。

○それぞれの校務がある中、毎週水曜日を基本の研修日としたが、その時間に限定するのではなく、柔軟に研究時間を確保することができた。そのことで研究への意欲や心のゆとりにつながった。

2　課題

●全体での学習会や交流の回数が少なかった。そのため、個々の研究は進んだが、全体での研究が深まらなかった。各学級の授業実践を参観したり、交流の回数を増やしたりすることで、個々の力量がさらに高まり、学校全体で取り組むべき方向性と重なり、校内研としてさらに深まっていくのではないか。

（研究主任　坂本　由香）

日川小学校

「主体的・協働的に学び、豊かに表現する児童の育成」

～ＩＣＴを活用した学びを深める授業づくりを通して～

Ⅰ　研究の内容

１　理論研究

（１）本校の課題、今年度の研究について

（２）子供主体の授業づくりをめざして

ア　単元（題材）デザインのしかたについて

イ　ＩＣＴの効果的な活用について

ウ　クラウドベースの学び方について

（３）学力向上のための授業づくりについて

２　授業研究

第１学年　那須　美佳　教諭 国語科「じどう車くらべ」　動画視聴　スクールタクト
第２学年　行田　玲子　教諭 音楽科「ようすをおもいうかべよう」　動画視聴・撮影
第３学年　飯嶋　瞳香　教諭 国語科「おすすめの一さつを決めよう」　動画撮影
第４学年　廣瀬　哲也　教諭 体育科「跳び箱運動」　動画視聴・撮影　スライド　スプレッドシート
第５学年　鈴木　陸人　教諭 算数科「ならした大きさを考えよう」　スプレッドシート
第６学年　望月　泰祐　教諭 算数科「比例の関係をくわしく調べよう」　Canva　スプレッドシート
はぐくみ　三枝　剛　教諭 国語科「慣用句」　パワーポイント　スクールタクト
かがやき　望月　清美　教諭 国語科「おすすめパンフレットを作ろう」　Canva
音　楽　高野恵美子　教諭 ３年音楽「手拍子でリズム」　スクールタクト

３　学びを支える学級集団づくり

学級力向上プロジェクトのとりくみ（全教職員で共有）

4　今日的教育課題関連の学習会

「緊急時（アレルギー発症）の対応について」　講師：齊藤　ふみ香　教諭

Ⅱ　成果と課題

1　成果

・個別最適な学び、協働的な学びの実現とともに、教員の授業観を「子供主体の授業観」へと変容させる契機になった。

・教員間でＩＣＴを活用した授業を参観し合うことで、互いの学びにつながった。

・ＩＣＴを活用することを目標にするのではなく、児童の学びを深めるために使うことを目標に、教材研究や授業準備を行うことができた。

・必要に応じてＩＣＴと紙を使い分けることができた。個別最適な学習形態を昨年度よりも実施することができた。児童が各自の学び方を習得し、学習できた。

・還流報告や働き方改革研修会により、意識の向上や実践につなげることができた。

・教員一人ひとりが、研究主題に沿った研修を行い、授業力の向上につながった。

・学級力アンケートの結果分析を教職員で共有することができた。

・個々の研究時間を確保し、各学年の発達段階に応じた研究ができた。

2　課題

・授業実践・公開は、年間を通して行えるとよい。子供主体の授業に向けて、自身の授業を日々見直し、改善するきっかけになると思う。

・ＩＣＴの活用において、教員間で個人差が出てきてしまっている。そのため、縦のつながりを意識して研究を深めていくことも必要である。また、効果的な活用の仕方等について各自で学び、スキルアップする必要がある。

・市で出してくださっているＩＣＴ活用スキル系統表のレベルまで達していない状況があるので、目標レベルまでもっていけるように努めたい。

・児童の思考力・表現力について、教員間の協働的な学びを通して、さらに高められるようにしたい。

・子供主体の授業づくりを展開する中で、学びを深めるためにＩＣＴを活用し、確かな学力の向上につなげることについて、今後もさらなる研究が必要である。

・情報の収集、分類、整理、要約などにおける生成ＡＩの活用の仕方を習得し、活用能力の向上をめざして、研究・研修を重ねていきたい。

Ⅲ　成果物

1　授業実践レポート

2　学級力向上プロジェクトの資料

3　校内研資料（クラウド化）

（研究主任　　望月清美）

山梨小学校

自ら課題を見つけ、自ら解決し、学び合う児童の育成

～「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させた学習実践を通して～

Ⅰ　研究の内容

1　研究目標

これまでの研究や実践、学習の基盤となる学習環境づくりを重んじつつも、現実的で持続可能な実践やクラウドを活用した具体的な実践を参考にし、教師が「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させた学習実践を通して、「自ら課題を見つけ、自ら解決し、学び合う」児童の育成を目指す。

2　研究活動

（1）授業づくりの研究・・・学習者主体の授業の実現

ア教師の学習観，支援や環境，学習過程，情報活用能力について

・学習会…山梨県総合教育センター　指導主事　飯窪　優　先生

・文部科学省　LDX スクール事業　協力校

イ　課題解決に向けた取り組み

・先行事例の実践

・一人一実践授業

第1学年	生活科「きせつとなかよしーふゆー」	山下　陽子教諭
第2学年	算数科「九九をつくろう」	岡村　理恵教諭
第3学年	国語科「小数」	小林　朱里教諭
第4学年	国語科「友情のかべ新聞」	雨宮　菜月教諭
第4学年	理科　「物の体積と温度」	向山　　潤教諭
第5学年	算数科「ならした大きさを考えよう」	佐野　理恵教諭
第6学年	算数科「比例の関係をくわしく調べよう」	中山　貴彰教諭
ひまわり	国語科「にたいみのことば　はんたいのいみのことば」	髙野　裕平教諭
なかよし	国語科「『鳥獣戯画』を読む」	梶原　裕子教諭

・仮説検証型から自己研修向上型へ(スキルアップ研修)

・振り返りシートや思考ツールを活用しての課題解決の実践

・板書の工夫（キーワードの明示や黄色チョークの活用）

・朝活や頑張り週間での小テストの継続による基礎学力の定着

・低学年高学年のブロックに分かれての課題解決の実践

（2）学級力向上・学習環境づくりへの取り組み

ア　学級力アンケートの実施、スマイルアクションの実施

イ　SST・SGE の実践

ウ　学びの個別化を支えるための AI ドリルの活用

エ　家庭学習・自主学習の可視化

Ⅱ　成果

○全教員が主題を念頭に置き、子供たちが選択できる学習内容を増やすなど、「個別最適な学び」を意識した授業が展開された。

○「子供主体の授業づくりハンドブック」の活用と可視化を行い、振り返りシートや思考ツールの活用、板書の工夫（キーワードの明示やチョークの色の選定）により、児童にとって学びのポイントが明確となった。

○ICTを手段の一つとして捉え、ワークシート等の紙ベースとデジタルをバランスよく効果的に活用できた。講師を招いた学習会を通じ、1時間単位ではなく「単元」という長いスパンで学びを捉え直す重要性や、子供主体の本質を教員自身が主体的に考える機会となった。

○「学級力向上プロジェクト」やSST・SGEの実践により、児童同士のつながりや認め合う力が向上し、話し合いの基盤が整った。

○朝活や頑張り週間での小テストにより、基礎学力の定着だけでなく、児童が自ら良い点を目指して学ぶ意欲が見られた。

○学習会や多学年の事例紹介、参考資料の提示が、教員が「やってみよう」と思える後押しとなった。

○全体での情報共有と、個人の「一人一実践」やスキルアップ研修の時間のバランスが良く、効率的に研究を進めることができた。

○他の教員の授業を参観することで、ICTの活用場面や全体共有のタイミングなど、具体的な手立てを学ぶ機会となった。

○全体での情報共有と、個人の「一人一実践」やスキルアップ研修の時間のバランスが良く、効率的に研究を進めることができた。

○他の教員の授業を参観することで、ICTの活用場面や全体共有のタイミングなど、具体的な手立てを学ぶ機会となった。

Ⅲ　課題

▲児童によっては情緒の安定を優先させる必要があり、小テスト等の学習習慣が十分に定着しなかったケースがあった。一人ひとりに応じた達成感を味わえる工夫が求められる。

▲自主学習の表やAIドリルの活用は進んだものの、「自ら学ぶ」という質的な向上については、さらに継続的な取り組みが必要である。

Ⅳ　成果物

1　一人一実践授業　指導案

2　「学級力向上プロジェクト」に関する資料

3　「振り返りシート（スプレッドシート）」

（研究主任　　山下　陽子）

八幡小学校

「生きる力を支える確かな学力の育成」

～ICT 端末の有効活用を含めた、主体的・対話的で深い学びに向けた授業づくり～

Ⅰ　研究の内容

1　授業づくり

（1）「やまなしスタンダード」の中の５つの視点に基づいた授業改善

②話合い、討論、発表などの言語活動を効果的に取り入れている。
③児童生徒は、他の人の話や発表に耳を傾けている。
④児童生徒は、ノートをとっている。
⑤活用・探究など、学んだことを別の場所で使うようにしている。
⑦家庭学習(宿題や課題)と授業が、有機的に結びついている。

《特別支援教育版》

②障害の状態に応じて自ら考え、判断し、表現する活動を具体的に取り入れている。
③自主的・自発的な学習を促す教材・教具等を用意している。
④達成感や自己肯定感が高められる指導を工夫している。
⑤学んだことが活用できる場を設定している。
⑥学んだことと実際の生活との関係を示し、学ぶ意欲を育てている。

（2）「主体的・対話的で深い学び」の実現

一人一実践授業を実施（１１月～１月）

・ICT を効果的に活用した授業づくりを行う。
・発問や問い返しを工夫する。
・板書やノート等と、ICT 端末の作業バランスを考える。
・お互いに授業を参観し合い、意見交換をする。

第１学年　音楽科　「がっきと なかよくなろう」
第２学年　国語科　「冬がいっぱい」
第４学年　国語科　「我ら環境調査隊」(調べて話そう、生活調査隊)
第５学年　算数科　「面積の求め方を考えよう」
第６学年　体育科　「体つくり運動でパワーアップ大作戦」
あおぎり学級　国語科　「おもちやとおもちゃ」

2　学級づくり

（1）学級力向上プロジェクト

・学級力向上プロジェクト　全学年実施
・学級力向上プロジェクト学習会（講師：髙野　栄子　教諭）

（2）Q-U の分析や学級経営の生かし方など、情報交換会の実施

・Q-U の結果を基に、各学年「Q-U 学級支援シート」を作成し、学級集団のタイプ・個別支援が必要な児童の様子・今後の取り組み方針などを確認した。

3　教育環境づくり

（1）アウトメディアの取り組み

・１学期および２学期に全学年で実施
・結果は集計し、家庭に実情や傾向を知らせた。

（２）読書推進活動の取り組み

・児童・教職員のおすすめの本の紹介
・図書委員による読み聞かせ
・読書ボランティアによる読み聞かせ
・ペア読書（高学年が低学年に読み聞かせ）
・家読（親子読書）
・読書ガチャ
・読書ビンゴ

（３）家庭学習の充実

・日課の中に、家庭学習スタンバイの時間を設定し、各学年の発達段階に応じて家庭学習の習慣化を図った。
・家庭学習の主旨について理解を深めてもらえるように、おたよりや学級懇談会を通じて保護者に説明をするとともに、子どものノートを廊下に掲示したりHPで紹介したりして家庭との連携を強化した。

４　個別研究の様子（教育活動全般）

マンダラートを使って、個々で研究・研修を進めた。

Ⅱ　成果と課題

○主体的・対話的で深い学びにつなげるためには、子供たちも教師もお互いに信頼できる学級づくりが不可欠だが、学級力向上プロジェクトにも取り組みながら、そこに向けた学級経営ができた。

○ICT端末を個人やグループ、学級など様々な形態で授業に取り入れたことや、Eライブラリーで児童の学力に応じた課題配布をしたことで、個別最適な学びができた。また、ICT端末を有効に活用できたことで、児童が主体的に学習に取り組み、理解を深めたり、児童同士の交流学習に役立てたりすることができた。

○家庭学習の取り組みの様子を学校HPに掲載したり、自主学習ノートを廊下に掲示したりし、取り組み内容を保護者に共有した。それにより、保護者の協力を得たり、褒めていただいたりなど、児童のモチベーション向上につながった。

○アウトメディアの取り組みを年２回実施することができた。そのため、昨年度よりも子供たちの意識の高まりが見られた。また、実施した結果や振り返りをまとめ、家庭にフィードバックできたことで、保護者の意識も高めることができた。

○インクルーシブ教育についてやSNSの使い方についてなど、様々な分野の学習をすることができた。

○マンダラートを用いて個人研究を進めたことで、自分が取り組んできたことを振り返る機会が増えた。また、部会の先生と交流することにより、先生方の日常の活動や指導の方法を知るとともに、たくさんのアドバイスをいただくことができ、とても勉強になった。

△ICT端末の活用については、取り組みの幅が広がってきているが、常に進化していくものなので、今後も学び続けていきたい。

△学校教育においてもSNSやゲームによる弊害が横行しているような昨今であるので、アウトメディアを進めていくことは大切な要素である。情報を正確に捉える知識や対面においての人との関係性を構築する力が必要である。また、本校の課題となっている、読書活動にもつなげていきたい。

Ⅲ　成果物

１　一人一実践の授業実践報告書
２　マンダラートの取り組みと成果・課題　　など

（研究主任　　神戸　美優）

岩手小学校

Ⅰ 研究の内容

1 研究主題

『主体的・対話的で深い学び』をめざした授業改善の実践

2 主題設定の理由

昨年度は、研究主題として、『学校課題を解決し、『主体的・対話的で深い学び』をめざした授業改善の実践』を設定し、WG（ワーキンググループ）による取組と日々の実践を積み重ね、授業改善を行ってきた。各WGで学校課題の解決に向け、充実した取組を行うことができた。また、学校全体がICTの活用に積極的になり、学習のいろいろな場面でICT端末を使い、まとめたり発表したりするなど、子供達のスキルも向上してきている。また、ICTを活用した様々な教材を作成することができ、成果をあげることができた。

そこで今年度は、学校現場で広く課題となっている子供主体の授業づくりに焦点をあて、市のリーディングDXスクール事業の取り組み等を参考にして授業改善に取り組んでいく。また、1人1台端末とクラウド環境を活用した授業を実践できるように、教師のICT端末活用のスキル向上を図るなど教員各自が主体となり、研究を推進する自己研修に重点をおいていく。昨年度に引き続き、ICT環境を活用した個別最適な学びと、協働的な学びの充実を図り、子供が主体となる授業づくりを通して、児童が多様な他者と協働したり、自ら自己調整したりして学習を進めていく姿を目指すことで、主体的・対話的で深い学びを充実させていきたいと考え、本研究主題を設定した。

3 研究の内容と方法

児童の実態をふまえ，自己研究をし，日々の実践を積み重ね，授業改善をする。
校内における共通財産として研修の場を設ける。

（1）一人一実践による授業改善

（2）学習会

・eライブラリオンライン研修 AIドリルの活用法について

・ICTスキルアップの体験型研修

・県教委主催の子供主体の授業づくりオンライン研修

（3）OJTの取組 日常的に教員間の相談・共有から，教員としての資質・能力を高めるOJTに発展させる。

Ⅱ 成果と課題

○『主体的・対話的で深い学び』の実践に向けて、授業づくりや授業の実践を通して考えることができた。また、子供主体の授業の実践に向けて他の先生方の授業を見て学ぶことができるよい機会を得ることができた。

○教科の枠を超えて「主体的・対話的で深い学び」という共通目標に向かって学び合ったことで、学校全体に「互いの実践から学ぶ」文化が定着した。これにより、個人の経験則に頼らない、組織的な指導力の底上げがなされた。

○本年度の研究は、「ICT という武器」と「子供主体という視点」を全教員が手に入れたことが最大の成果といえる。この土台の上に、次年度はさらに「対話」や「思考の深まり」を精査する、より質の高い授業実践が期待できる段階に到達していると考える。

●ICT 活用が日常化したからこそ、アナログとの使い分けや、教師が「教えすぎない」授業設計が求められている。

●課題として「イメージの共有」が挙げられた点は非常に重要である。次年度は、抽象的な言葉ではなく「この場面で子供がこう動けば主体的な学びと言える」といった、具体的な「見取りの指標」を共通認識にすることで、授業改善の足並みがより強固になると考える。

●自己研修による「個の深まり」を、どうやって「学校全体の知恵」として還元していくかが今後の鍵である。個人の研鑽を尊重しつつ、他校の事例やICT のテクニックを効率的にシェアし合う「アウトプットの場」を意図的に設けることが有効である。

Ⅲ 成果物

1 授業実践指導案及び記録

第1学年	国語科「じどう車くらべ」	加々美教子教諭
第3学年	算数科「まるい形を調べよう」	関口 若子教諭
第3・4学年	音楽科「いろいろな音のひびきをかんじとろう」	長谷川未紗教諭
第4学年	道徳科「友だちが泣いている」	岩崎 利香教諭
第5学年	道徳科「いじめをなくすために」	木下 雄基教諭
第5学年	家庭科「3つの食品のグループとそのはたらき」	丸田 直美教諭
第6学年	社会科「戦争と人々のくらし」	今澤比呂樹教諭

（研究主任 加々美 教子）

笛川小学校

「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図る授業づくり」
～自ら課題を見つけ、自ら解決しようとする児童の育成～

Ⅰ　研究内容

1　研究について

昨年度からの研究の流れを引き継ぎ、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図る授業づくり」を研究主題とし、自ら課題を見つけ、自ら解決しようとする児童の育成をめざし、研究に取り組んでいる。

2　研究の具体的内容と方法

（１）リーディングDXスクール事業にかかわる学習会の実施

講師：学校DX戦略アドバイザー　柏市教育委員会教育研究専門アドバイザー
西田　光昭先生

①「授業DX校務DXについて」（５月１４日）笛川小授業参観後ご講演
②「クラウド環境を活用した個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実について」（６月１８日）笛川中授業公開後ご講演
③「探究のサイクルでの授業づくり・クラウド環境を活用した校務DX」（７月９日）
④「PBL公開授業にかかわる指導・助言」（１０月３０日）
⑤「私たちの郷土を学び、郷土について考えよう」公開授業・研究会（１１月６日）
⑥「学びのDX校務DX」（１１月２６日）笛川小授業参観後ご講演
⑦「これからの学びをつくる」（１２月１０日）

（２）公開授業及び一人一実践

ア 令和7年度文部科学省委託「リーディングDX事業」公開授業
「私たちの郷土を学び、郷土について考えよう」
小学5・6中学1・2年生合同授業　総合的な学習の時間(問題解決型学習)

イ 一人一実践

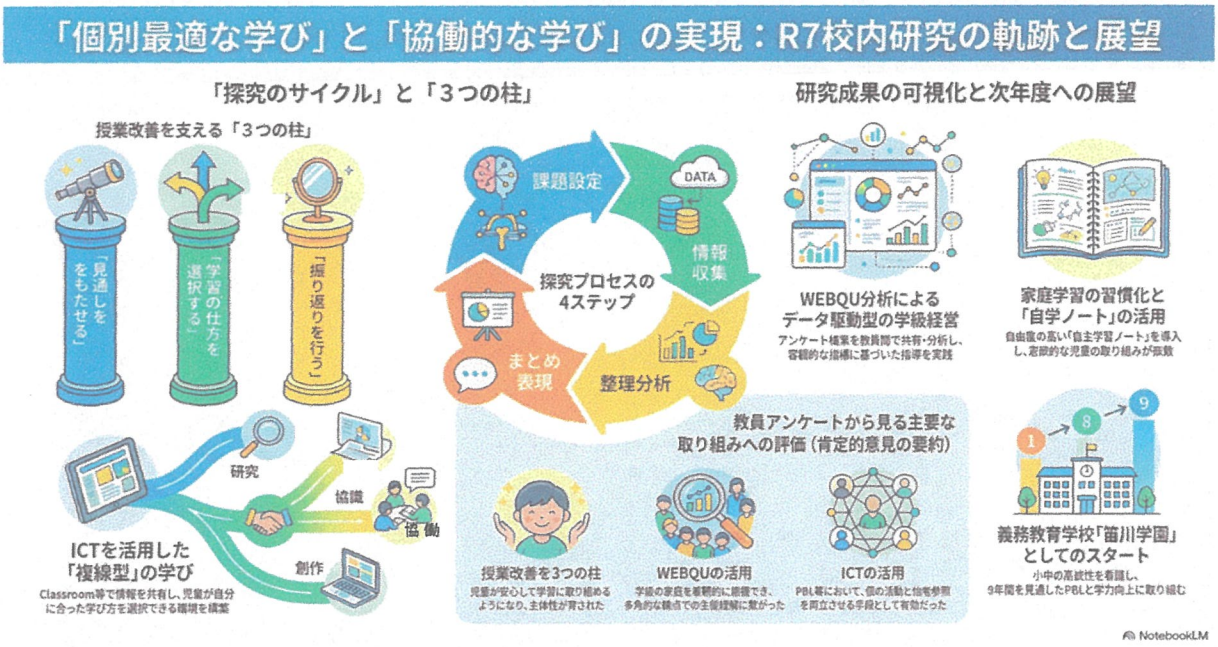
第1学年	算数科「ひきざん」	柳澤　晴子教諭
第1学年	音楽科「がっきとなかよくなろう」	小椋　恵美教諭
第2学年	国語科「にたいみのことば、はんたいのいみのことば」	奥山悠衣香教諭
第3学年	国語科「すがたをかえる大豆　」	田中奈都美教諭
第3学年	音楽科「いろいろな音のひびきに親しもう」	保坂千恵子教諭
第4学年	国語科「リーフレットをつくろう」	平山　沙織教諭
第5学年	総　合「お米人気回復プロジェクト」	向山　　澄教諭
第6学年	社会科「近代国家をめざして」	武居　拓己教諭
こだま学級	国語科「おねがいのしかたをしろう」	相澤　拓実教諭
つつみ学級	国語科「すがたをかえる大豆」	鶴田　　望教諭
ことのね1学級	国語科「かん字のはなし」	小林　宏美教諭
ことのね2学級	自立活動「自立活動について知ろう」	橘田　　栄教諭
かがやき学級	学　活「自分たちにできることを考えよう」	遊免阿吏沙教諭
日本語指導	国語科「たのむとき、たずねるときの言い方」	檜垣　貴子教諭
通級指導	算数科「数の表し方や仕組みを調べよう」	金子佐由美教諭

通級指導　　自立活動「よく見て、正確に理解しよう」　　永関　亜美教諭
保　　健　　「歯科保健指導」　　丸山沙緒里養護教諭

（3） WEBQU アンケートを活用した学級集団づくり

WEBQU アンケートの 2 回の実施と分析、対応策を活用した学級集団づくりの取組

Ⅱ　成果と課題



Ⅰ　成果

- 講師による授業観察及び学習会を通して、探究のサイクルの効果を再確認し、授業づくりにおいての共通理解が図られた。
- 探究のプロセスや学び方について掲示物を示すことで、児童が見通しをもちながら学習を進めることができるようになった。
- 自己選択の場面を意識した授業を仕組むことにより、児童の主体性の向上が図られた。
- WEBQU アンケートの結果分析では、低・中・高学年ごとに分かれ、多角的な視点から児童への手立てを検討することができた。学級担任だけでなく、様々な立場で児童とかかわる中で、支援を必要とする児童について、共通理解を図りながら対応することにつながった。

2　課題

- 「自ら課題を見つける」ことについては、発達段階や課題の提示などの課題点が挙げられる。児童が主体的に学ぶために、課題の設定や問いの立て方についてさらに研究をしていきたい。
- 振り返りの時間が十分に確保できなかったり、内容が深まらなかったりする傾向があった。主体的な学びにつなげるための指導の工夫が必要である。
- 自主学習に意欲的な児童と習慣化されていない児童に差が見られた。具体的な取り組み方の提示の仕方、目的意識の向上、家庭との連携などが必要である。

Ⅲ　成果物

1　PBL にかかわる授業構想・授業の取組・公開研究会資料など
2　一人一実践指導案
3　探究のサイクル・学び方にかかわる教室掲示物

（研究主任　平山　沙織）

塩山南小学校

「自ら課題を見つけ，自ら解決しようとする児童の育成（3年次）
ー個別最適な学びと協働的な学びの一体化を通してー」

Ⅰ 研究内容

1 主な研究内容

(1)「子供一人一人が主語の授業づくり」について

①「探究サイクル」×「思考スキル」で深い学びの実現を目指す

- 「探究サイクル」×「南小思考スキル及び見方・考え方（適切な観点を決めて考える）」
- 子供が自ら見方・考え方を働かせて学習するための手立て
- 情報を「エディット」するための手立て

②子供一人一人が学習の「目的意識」をもつことができる単元設計（単元を核とした授業づくり）

- 教科の目標とその目標を達成するための計画の明確化
- 学びを自己選択・自己決定していくための取組（学びのスケールの活用）

③学びの専門職としての教師の役割

- 子供一人一人や学級集団の適切な見取りと効果的な支援
- 多様な他者と協働するための支援、手立て　・子供の思考と議論を活性化するための支援
- 学びを自己選択・自己決定していくための取組（仕掛けづくり）

(2)「個別最適な学び」を支える「協働的な学び」を実現させるための環境づくり

- WEB-QU を行い、具体的な解決策や対応策などの検討・実施
- 子供一人一人が学びやすい学習環境づくり（校内の環境整備・外部との連携）
- 情報活用能力向上の取組　・生成 AI の活用（授業&校務）

2 具体的な研究活動

(1)指導主事を招聘し「子供一人一人が主語の授業づくり」に関する学習会

- 6月18日 講師：飯窪 優 指導主事（山梨県総合教育センター）

(2)生成 AI パイロット校としての取組

- 6月23日情報主任による「生成 AI の活用について」の学習会
- 9月9日 「生成 AI の教育利用」に関する学習会 講師：吉田 塁 准教授（東京大学）
- 先進校視察及び還流報告→先進校の実践を情報共有し、教員の資質・向上を図る
- 「生成AIびらきの授業」を全クラスで実施し、クラスのルールづくりを行う
- 授業での活用アイディアを出し合い、具体的に授業をデザイン・実践

(3)研究授業及び一人一実践

- ・研究授業（9月24日）　第3学年 国語科「ごんぎつね」 佐野 優吾 教諭
- 一人一実践（研究成果物の「塩山南小校内研究サイト」を参照のこと）

(4)協働的な学びを支える親和的な学級集団作りに関する取組

- WEBQU の実施し、教職員全体で具体的な解決策や対応策を検討・実施
- 朝学習に週１回の「みなみっこタイム」の実施

(5)ICT 端末活用のスキルや情報モラルの向上に関する取組

- 週１回の朝学習のチャレンジタイムの活用（タイピング練習等）　・GIGA ワークブックの活用

Ⅱ 成果と課題

1 子供主体の授業づくりについて

○ 学校全体で「探究サイクル」を意識し、ガイダンスシートや Classroom 等で 1 時間の流れや単元のゴールを可視化したため、児童が見通しと目的意識を持ち、主体的に学習に臨めるようになってきた。

○ 「自己選択・自己決定」の場面（学習形態、ツール、課題解決方法など）を多く設定したことで、児童が自己選択し、教え合いながら学びに向かうことができた。

○ 一人一台端末やクラウド環境の日常的な活用に加え、生成 AI を授業に利活用することで、深い学びにつなげるための授業改善を図ることができた。

● 一人一台端末の活用は日常化したが、ルーブリックを意味なく選んだり、学習の流れを確認しなかったりと、形骸化してきてしまっている場面がある。使う「目的」を子供たちと再確認し、自ら考え、判断するために活用する姿勢を育てていきたい。

● 子供に委ねる場面（自由度）が増えた分、子供一人一人の習熟度や進度を把握し、個に応じて適切な指導ができるようにしていく必要がある。

● 子供を主体にするほど、教師側には「教科の本質」を突く発問や、子供が夢中になる課題の設定など、より深い教材研究が求められる。表面的な活動で終わらせず、その教科ならではの「見方・考え方」を働かせた深い学びのための授業改善を継続していく。

● 生成 AI を使うこと自体は浸透してきたが、児童の資質・能力の向上や深い思考に繋がるための活用について、実践・検証していく必要がある。

2 「個別最適な学び」を支える「協働的な学び」を実現させるための環境づくりについて

○ WEB-QU を活用し、ブロック等で具体的な悩みや改善策を全職員で共有・協議し、組織的な対応ができた。安心して学べる「親和的な雰囲気」が醸成され、学習の土台となる集団づくりが進んだ。

○ 情報主任を中心に、全校統一の「授業開き」などで生成 AI の基本的な使い方や留意点に関する指導を徹底したため、AI 時代に求められる情報活用能力の基礎がつくられた。

○ 思考を整理するツールや、学びを支える掲示物を効果的に活用したことで、児童の思考が整理されやすくなり、自立的な学習を支える物理的・視覚的な環境が整った。

● 個別最適な学びを支える、個々の力をどのように支援していくのか、ボトムアップを目指す指導が必要である。個々が認められ、安心して学ぶことができる場が整っているので、伝えたいと思う学びをどの子にも保障する手立てを講じていくことが課題である。

● 協働的な学びの質を向上させるために、教室以外のスペース（けやき広場等）の活用方法を工夫し、子供が活動場所を自由に選択できる環境を整える必要がある。

● 教師が明確な意図を持ってグループを構成することに加え、子供自身に「なぜ今、誰と対話するのか」という視点を持たせ、目的意識のある交流を促す工夫をしていきたい。

Ⅲ 成果物

- Googleサイトによる校内研究紀要のまとめ
- 「生成 AI 授業開き」に関する指導資料
- 生成 AI の授業アイディア集及び実践事例集

校内研サイト

（研究主任 池田 理恵子）

塩山北小学校

「自ら学び続ける児童の育成」
～児童の姿から見つめる、学習者主体の授業づくりを通して～

Ⅰ　研究内容

1　研究について

今年度は、昨年度取り組んだ、国語科・外国語科における「見方・考え方」を働かせる授業づくりの成果を継承・発展させ、本校の児童の課題であり、現在の社会で求められている「主体的に学びに向かう児童」の育成を目指し、「自ら学び続ける児童の育成」を研究主題に据えて、実践を積み重ねた。

昨年度は、国語科と外国語科において、「見方・考え方」を働かせるための言語活動を中心に研究を進めた。そこで、今年度は、対象教科を全教科へと広げ、各教科固有の「見方・考え方」を働かせる場面を意図的に設定することで、児童の学びの質が向上し、資質・能力の定着を伴う深い学びへとつながる授業をつくる、実践研究に取り組んだ。

具体的な取組として、まず全教職員で国語科・算数科における「見方・考え方」を、発達段階に応じた変化も踏まえ再確認し、共通の掲示物を作成することで、児童が日常的に意識できる環境を整備した。また、指導の系統性と単元構成の可視化を図るため、「単元構想シート」を作成し、それをもとに授業づくりを行う一人一実践に取り組んだ。これにより、単元のゴールである身につけたい資質・能力から逆算し、児童の主体的な活動や「見方・考え方」を働かせる場面を明確にした授業づくりを進めることができた。一人一実践の公開授業や算数科における研究授業と、児童の具体的な変容の姿に基づいた授業後の検討会を通して、理論と実践の両面から研究を深めた。

2　研究の具体的内容と方法

（1）授業研究及び研究会

○算数科「分数をくわしく調べよう」（第4学年「A 数と計算」）（11月26日）
保坂 彩夏 教諭

指導・助言:峡東教育事務所 指導主事　岩下 和子 先生

（2）一人一実践

第1学年	算数科「かたちあそび」	倉田 和美 教諭
第2学年	国語科「どうぶつ園のじゅうい」	雨宮 笑菜 教諭
第3学年	国語科「まいごのかぎ」	市川 安紀 教諭
第5学年	国語科「固有種が教えてくれること」	三枝 英太郎 教諭
第6学年	国語科「やまなし」	永関 良太 教諭
たんぽぽ学級	自立活動「気持ちの色を考えよう」	村松 夏帆 教諭
ひまわり学級	算数科「1000より大きい数を調べよう」	古屋 ゆか 教諭
教務	理科「自然の中の水のすがた」	畑 佑弥 教諭
外国語専科	外国語科「This is my town. ～甲州市の魅力を世界に発信！～」	山口 大弥 教諭

（3）協働的な学びを支える親和的な学級集団づくりに関する取組

ア WEBQU調査の実施・その後事例検討会を行い、対応策を検討及び実施

Ⅱ　成果と課題（○成果　●課題）

1　授業研究及び研究会・一人一実践

○昨年度までの本校の研究の継続、社会的背景などから考えられた研究主題だった。学習者主体の授業を展開するために、各教科特有の「見方・考え方」について研究を深めながら進めることができた。

○授業づくりをする際に、児童の目線に立ち返って考え、見通しを持って取り組むことができた。児童の姿を見つめ、この単元でどのような力を身に付けさせることができたのかと、自身の授業づくりを振り返る機会となった。

○共通した「見方・考え方」を認識していることで、学年が異なっても意識すべきことを明確化して授業づくりを行うことができた。担当学年はもちろん、系統性を理解して指導していくことの大切さを学ぶことができた。

○単元構想シートを作成することで、何を教えなければいけないのか、児童はどんな知識を武器として備えている状態なのか、どんな視点で教材を見ればよいのか、連続性を意識して考えることができた。

○一人一実践を参観することで、異学年での学習を知り、学びの連続性を生かした指導（既習を活かす導入・展開）ができるようになった。ファシリテーターとしての教師の役割という意味でも学びが深まった。

○教師が児童に意図をもって関わるという指導を研究授業で見ることができた。児童のつながりを生み、思考が深まるような展開があり、研究が深まった。

●どのような単元のゴールを設定するかにより、児童の学びの深まりが異なる。どの児童にとっても、自ら学びたいと思える単元の課題を設定し、単元の中で児童にゆだねる場面、教師が指導する場面をバランスよく設けていく必要がある。先進校の授業等を学びながら、よりよい単元づくりについて、さらに研究を深めていく必要がある。

●先進的な取組の授業動画や有識者の見解動画を見る等の研究も設けてもよいのではないか。理論的な部分や目標とする姿をチームとして共有することで、指導の一貫性が生まれると思う。

2　協働的な学びを支える親和的な学級集団づくりに関する取組

○協働的な学びを支える親和的な学級集団づくりには、児童の現状を把握し、よりよいかかわり方を検討していく必要がある。そのために、すばやく結果を知ることができるWEBQUの調査・分析は有効であった。

○WEBQU の調査・分析を通して、学級の様子や学級経営を振り返る機会となった。さまざまな立場から調査・分析の結果を共有することで、児童一人ひとりの様子を把握し、より親和的な学級集団をつくるための具体的な案を検討し、実践することができた。

Ⅲ　成果物

1　研究授業指導案・一人一実践指導案

2　国語科・算数科の「見方・考え方」の掲示資料（全学年）

3　単元構想シート

4　Google ドライブへの校内研究会の資料の蓄積　　（研究主任　市川　安紀）

奥野田小学校

「主体的に表現する児童」の育成に関する研究

—ICTを活用した対話的な学びをつくる授業（2年次）—

Ⅰ 研究の内容

1 授業研究

（1）研究授業

第1学年 算数科 「かたちあそび」 中嶋 由佳教諭

（2）一実践授業

第2学年 算数科 「かけ算（2）」 堀内 美紀教諭

第3学年 国語科 「三年とうげ」 青木可奈子教諭

第4学年 体育科 「器械運動『跳び箱運動』」 佐野 誠一教諭

第5学年 道徳科 「2つの教材から考える『よりよい生き方』とは」 小泉 匡之教諭

第6学年 社会科 「明治の新しい国づくり」 竹川 憲任教諭

知的〔すみれ〕学級 自閉症・情緒〔つくし〕学級

算数科 「平均「『ならした大きさを考えよう』」 高石 圭子教諭 大村ひとみ教諭

第5学年 理科 「流れる水のはたらき」 雨宮 正 教諭

（3）算数の基礎学力定着に向けての取組

『算数オリンピック』・・・「数と計算」領域の学年相当の基礎学力定着を目指して

2 学級集団づくり

WEBQU 検査（全学年）実施とアタックシートの作成・活用の充実

3 ICT 機器の活用

（1）ICT 端末に関わる技術向上のための研修

（2）「ICT 端末活用の記録」作成

（3）ICT 端末活用時の「やくそく」の検討

（4）「奥小っこ『学び方』の目標」作成

（5）「おくのた『すごいぞ!』マップ」作成

Ⅱ 成果と課題

1 成果

・本校児童の実態に即した主題設定となり、「表現（アウトプット）」を重視する授業づくりの方向性を全職員で共有できた。また、ICT 活用と対話を通して、多様な方法で考えを表現し、他者の考えに触れながら学びを深める授業実践が各学年で進んだ。

・「ICT の活用が目的ではなく、目的を達成するための ICT の活用法を研究する」という共通認識のもと、「児童の思考力・判断力・表現力を伸ばすための ICT の活用法」について多角的な視点で研究することができた。

・「主体的に表現する児童」の育成に向けて、練り上げられた研究授業となった。研究授業では児童が主体的に交流する姿が多く見られた。児童が自分の考えを表現する方法も様々で、日常的に自分で選択し、表現する活動を繰り返し行っていることを感じた。ICT を活用した授業づくりにおいて、先生方の授業力の向上に大きくつながった。

・授業時数特例校制度により、生活科・総合的な学習の時間の時数を増やしたことで、地域を題材とした探究学習を体験的に深めることができた。

・教育課程の再編成を通して教職員のカリキュラム・マネジメント力が高まり、学校全体の学びの質の向上につながった。今年度も、算数の基礎学力定着に向けた取組として、「計算力」に焦点を絞った「算数オリンピック」（学期１回）を実施した。子ども達が楽しく意欲的に取り組めるよう工夫を重ね、算数の学習に自信をもって取り組むための基盤作りとして有効な取組であった。

2 課題

・研究の成果が学力向上にどのようにつながったか、客観的に示す視点や検証方法について明確にすることが必要である。また、アウトプットが目的化しないよう、課題意識に沿ったまとめ方や思考の深化につながる支援・軌道修正を適切に行う必要がある。

・授業時数特例校として「何のために時数を増やすのか」という目的や、育てたい資質を明確にし、次年度以降へ継承する必要がある。

・「算数オリンピック」実施の方法を工夫してきたが、まだ意欲や学習の理解度に大きな差が見られる。本活動が真に基礎学力の定着や学習への主体性につながっているかを検証するとともに、出題問題の精選にまで踏み込んだ取組へと深化させていきたい。

・授業実践を通して、指導の成果や課題が明らかになり、より指導力の向上に努めることができた。さらに、低学年でどのような積み上げをしていくと効果的なのかを明らかにしていきたい。また、より児童の発達段階に合わせた授業づくりについて、取組を進めたい。

Ⅲ 成果物

1　研究授業・一人一実践授業の指導案、使用した教具、ワークシート

2　奥小っこ『学び方』の目標

3　ICT 端末活用の記録

（研究主任　小泉　匡之）

大藤小学校

「主体的に表現する児童の育成」

～少人数学級における学習者主体の授業をつくる指導方法の工夫～

Ⅰ　研究の内容

1 教員のICTを活用した指導力の育成

（1）講師を招聘。「学習者主体の授業」の指導方法について研修

（2）校内での実践研修　講師　岩下　和子指導主事

2 授業づくり

（1）子ども観の問い直し。教師は多様性の深い理解と自立性を信頼する覚悟が必要。

（2）CRT調査、全国学力・学習状況調査の分析。学習面の成果を把握し、課題を明確にして授業改善に生かす。

（3）先進校の事例に倣い、段階的に自己決定的な学習を増やしていく。

（4）少人数や小集団、個を生かして、自由に使える学習環境の構築

（5）思考スキルの段階的活用

（6）学習の見通しを持てるような学習シートの作成と活用

（7）一人一実践

3 児童の実態把握と集団づくり

（1）WEBQUを生かした児童理解と集団づくりについての実践研修　講師　小泉　里菜SC

（2）WEBQUの結果分析と事例検討会シートを活用し、集団づくりを行う。

4 学びを促す環境づくり

（1）学年に応じた「大藤スタンダード」の徹底

（2）5つの合言葉の具体的な場面での取組を実践

〈わくわくべんきょう〉・・・勉強のスタートは、驚きや疑問、楽しく学ぶ。

〈のびのびとうこう〉・・・何事も夢中でする。徹底してする。

〈みんななかよし〉・・・いじめや仲間外れを生まない集団でいよう。

〈にこにこあいさつ〉・・・あいさつ、返事をしっかりする。

〈いきいきかつどう〉・・・自ら考えて行動する。自分で決めて、自分で守る。

（3）朝、端末を開く習慣をつける。心の羅針盤、classroomなどで今日の授業内容のチェック

（4）家庭学習定着を図る環境整備

「家庭学習」を年間通して実施

ノートだけにこだわらない学び→はじめよう！これからの家庭学習.pdf

ア　自学ノートを共有ドライブで共有する

イ　スライドの共有

ウ　自己決定と自己調整　スプレッドシート、カレンダーで

5.　研究実践

（1）研究授業

第1学年　　国語　　授業者　武井 克修　　指導助言　岩下 和子指導主事

（2）一人一実践

第1・2学年	音楽	授業者	中村　千春
第4学年	算数	授業者	廣瀬　瑠美
第6学年	算数	授業者	深澤　侑太
第5・6学年	音楽	授業者	三森　明美
なかよし学級	自立活動	授業者	相澤　由佳

Ⅱ　成果と課題

成果 本年度は、少人数学級の特性を最大限に生かし、児童一人一人にスポットライトを当てた「主体的な表現」の育成に注力した。 最大の成果は、教員間で「学習者主体」の定義の意識化が進み、授業や行事において児童が学んだことを言語化・発信する機会を意図的に創出できたことである。発達段階に応じた課題設定と、個別のきめ細かな支援を組み合わせることで、児童が達成感を味わいながら意欲的に表現する姿が見られた。 また、授業の流れの提示やルーブリックの活用が定着し、児童が学習の見通しを持てるようになったことも大きな前進である。全教員による「一人一実践」を通し、落ち着いた学習環境と教員・児童間の信頼関係がすべての教育活動の基盤であることを再確認できた。

課題 少人数学級ゆえの構造的な課題も浮き彫りとなった。 第一に、特定の意見に引きずられやすく多様な考えに触れる機会が限定的になりがちな点である。「言わなくてもわかる」という相互理解に頼らず、いかに多様な表現を引き出し、思考を深めさせるかが継続的な課題である。 第二に、「学習者主体」の姿や手立てに抽象的な部分が残っている点である。授業のどの場面でどのような姿が見られれば「主体的な表現」と言えるのか、共通の評価指標をより具体化する必要がある。 第三に、ICT 活用の高度化である。操作スキルの向上に伴い、従来の活用に留まらず、思考を深める「文房具」として活用方法をアップデートしなければならない。

Ⅲ　成果物

1　学習会資料

2　WEBQU 対応策シート

3　授業実践指導案

4　全国学力・学習状況調査分析結果

（研究主任　　中村　千春）

神金小学校

「自ら考え、表現し、学び合う児童の育成」
～ICT を効果的に活用した授業づくりを通して～

Ⅰ 研究の内容

1 研究目標

探究のプロセスにおいて、ICT を効果的に活用していくことで、主体的に学び、表現し、学び合う児童の育成を目指す。

2 具体的内容と方法

(1) 授業づくり

ア 児童の実態把握

・Q-Uの分析

・全国学力テストの分析

イ 研究授業としての一人一実践の実施

・情報の活用を意識した授業の工夫と改善

・ICT 環境を活用した実践(日常の授業の中での活用を図る)

・学校間ネットワークの交流実践の継続

ウ「ふるさと学習」の取り組み

・地域人材の活用

・地域との連携と情報発信

・「ふるさと学習」の発表会

(2) 学習基盤づくり(甲州プロジェクトと関わって)

ア Q-U調査の実施(2回)と分析

イ 互いに認め合い、高めあえる集団づくりを目指した学級活動の取組

ウ 家庭学習や学習規律の確立の取組(神小スタンダードの活用)

エ 生活環境向上の取組(GIGA ワークブックの活用・アウトメディアチャレンジ)

3 具体的な取組

(1) 一人一実践

第1学年国語科「じどう車くらべ」	小河真由美教諭
第2学年算数科「新しい計算を考えよう」	川崎　幸江教諭
第5学年社会科「日本の工業生産と貿易・運輸」	武田　　舞教諭
第6学年理科「てこのはたらきとしくみ」	亀山昂太郎教諭

（2） ふるさと学習発表会

第1・2学年　「しょうかいします!!1年生・2年生とふるさと神金のステキ」

第3学年　「わが母校 神金小学校」

第4・5学年　「上条集落について」

第6学年　「神金の足跡、平和への一歩」

（3） アウトメディアチャレンジ

・「メディアの使用時間」「起床時間」「就寝時間」「家庭学習の時間」「読書の時間」「運動の時間」の記録（チャレンジシート）

・自ら設定した「メディア利用の目標」に対する自己評価

Ⅱ 成果と課題

1 成果

・ICT にかかわる学習会をおこなったことで実際の授業に取り入れるイメージができ、一実践につなげることができた。

・一実践を通して、実態に合わせた様々な ICT の活用方法を学ぶことができた。また、プチ研究会を設定したことによって、自分の実践を見つめ直すきっかけになった。

・本校のふるさと学習は、児童が自分たちのふるさとについて考え、学ぶことができる貴重な機会となっている。学習の中で地域の方と交流したり、学んだことの伝え方を模索したりすることが、児童にとって有意義な学習となっている。今後も継続していきたい。

・Q-U 分析を活用したことで、全職員が全校児童の実態を把握し、学級指導に生かすことができた。

・集団づくりにおいては、少人数のため各学級での取り組みが難しい部分もあったが、児童会を中心とした全校での活動が効果的だった。

・アウトメディアチャレンジでは、メディアを使う時間を可視化することで、メディアとの適切な距離感を見つめ直すきっかけとなった。また、親子で生活習慣を振り返ることで、規則正しい生活習慣の確立に向けた意識を高めることができた。

2 課題

・ICT を使って、児童が「自ら学びたい」と思えるような活動を仕組んでいけると良い。

・デジタルとアナログの良さを組み合わせた授業づくりを模索していく。

・家庭学習や学習規律については、個人差や家庭環境の差が大きい。引き続き家庭への働きかけをおこなっていきたい。

Ⅲ 成果物

・一人一実践授業案　・ふるさと学習実践資料

・神小スタンダード　・アウトメディアチャレンジ

（研究主任 武田 舞）

玉宮小学校

「主体的に学ぶ児童の育成」

～地域連携とICT活用による主体的な学びの深化～

Ⅰ 研究の内容

1．子供主体の授業づくり

（1）学習会

◇「夢をかなえる学びのプロジェクト」子供主体の授業とICTの活用

講師：甲州市教育委員会教育総務課 金森 淳 指導主事

（2）一人一実践授業及び振り返り

・第1学年生活科「きせつとなかよし　あき」　授業者 中村 潤子 教諭

・第4学年社会科「昔から今へと続くまちづくり」　授業者 山本 諭 教諭

・第3・4学年総合科「玉宮地区に受け継がれてきたものを調べに行こう」　授業者 奥山 美恵 教諭

・第5学年国語科「自然環境を守るために」　授業者 仁科 桂太 教諭

・ほたる学級自立活動「たまみやのたのしいかるた」授業者 近藤 祐未 教諭

（3）児童のICT活用スキルの向上に向けた取組

現状把握と対策（「めざせ!!タイピング名人!!」「らっこたん」等）

2．みんなが安心して学べる学級づくり・集団づくり

（1）WEBQU調査の分析と対策

・全職員によるWEBQUの分析と対策

（2）人間関係の向上を目指した取組

・なかよしスキルタイム（構成的エンカウンター、ソーシャルスキルトレーニング）

（3）学習規律の確立

・「玉宮小学習スタンダード」の定着

3．保護者・地域家庭と連携した取組

（1）社会に開かれた教育課程の編成・充実

・臨地研修

・地域学習年間計画の見直し

（2）家庭学習の充実

・自主学習メニューの提示「自主学習の進め方」

・自主学習ノートの紹介（自主学習掲示コーナー、学年便り等）

Ⅱ 成果と課題

1. 授業づくりに関わって

甲州市指導主事である金森淳先生をはじめ、講師招聘によるICT活用やインクルーシブ教育、言葉かけに関わる学習会、地域での臨地研修など、多角的で充実した研修を通して、教師自身の指導知識と専門性を高めることができた。「一人一実践」では、互いの授業を参観し、子供主体の授業づくりを目指して全員で学び合うことができた。地域と連携したリアルな体験を授業に生かすことで、児童が主体的に学ぶきっかけを作り出し、一人一人の学びをより深めることにつながった。校内研の時間枠にとらわれず、日常的に教員間で情報交換や授業改善の対話を重ねられたことは、学校全体で研究を推進する上での大きな成果であった。

今後も、児童の興味関心を引き出し、主体的な学びを促すための多様な学習活動を、授業実践を共有する中で探っていきたい。

2. 学級づくり・集団づくりに関わって

主体的な学びの土台となる「安心できる集団づくり」を目指し、WebQUの分析や対応策シートの作成、「なかよしスキルタイム」を意図的・計画的に実施することができた。これにより、児童が互いの良さを認め合い、より良い人間関係を築くための基礎が育まれてきている。次年度は、さらにスキルを高めていけるよう、活動内容を工夫していきたい。

また、全教職員が「一人一人の担任」という意識を持ち、QUの分析に基づいた児童対応や日頃の関わりを共有したことで、子供たちの良さを再確認しながら学校全体で支援することができた。こうした集団づくりの取り組みは、児童が安心して学べる環境を支える上で不可欠であり、次年度も継続して全職員で取り組んでいけるとよい。

3. 保護者・地域住民との連携に関わって

地域人材や教材を積極的に活用した学習に加え、ふれあい学習発表会等での発信を通して地域との絆が深まり、今後はSDGsの視点など「地域への還元」を見据えた活動の発展が期待される。「自主学習ノート」の取り組みは定着しつつあるが、内容の質の向上やマンネリ化防止、さらには家庭とのより効果的な連携の在り方について工夫の余地が残されている。今年度初めて実施した全校学習など、子供たちの手による主体的な活動を大切にしながら、家庭・地域と一体となって学習意欲を高めていく継続的な体制づくりが重要である。

Ⅲ 成果物

・子供主体の授業づくりに向けた実践授業の授業案
・地域学習年間計画
・玉宮小子ども学習サイト

（研究主任 奥山 美恵）

松里小学校

「主体的・対話的で深い学び」を実現する児童の育成

～「個別最適な学び」と「協働的な学び」を取り入れた授業づくりを通して～

Ⅰ　研究内容と方法

1　具体的な研究内容

（1）授業改善に関わって

○「個別最適な学び」と「協働的な学び」を取り入れた授業実践

・探究的な学びのサイクルを意識した授業実践（11/19　ブロック研修）
・ICT の活用方法に関する学習会
・「甲州市ティーチャーズノート」についての学習会
・校内の取り組みの実践紹介及び学習会

（2）親和的学級づくりに関わって

○確かな学力を育成するための取り組みの継続

・WEBQ-U の結果分析や親和的な学級集団づくりに関する研修
・道徳の授業を通した児童理解についての講義
・家庭学習やメディアコントロールへの取り組み
・学級力向上プロジェクトの取り組み

2　研究の方法

（1）「個別最適な学び」や「協働的な学び」についての研修
（2）講師を招いての学習会
（3）ICT の活用方法に関する学習会・実践
（4）校内の取り組みの実践紹介（ポスターセッション）

3　具体的な取り組み

（1）学習会

ア 道徳の授業を通した児童理解についての講義
（講師　総合教育センター　相談支援センター　田中　一弘先生）

イ 教育 DX と生成 AI の活用についての講義（講師　加納岩小　古屋達郎先生）

（２）学級力向上プロジェクトの取り組み

学級づくりに向けた主体性と自己改善を図る態度を育てることをねらいとして、学期に１回（6月、11月）クラスで学級力向上プロジェクトの取り組みを行った。チャートの結果から、クラスの子どもたち自身が自分たちの学級を客観的な指標に基づいて分析し、学級をよりよくするための取り組みを考え出したり、取り組みのふり返りを継続したりしていくことで、子どもたちの学級改善の実践力を高めた。

（３）校内の取り組みの実践紹介・学習会

11/19のブロック研修で行った１年生国語、３年生英語、５年生算数の授業公開に加え、普段の授業の中で行っている探究的な学びのサイクルを意識した授業実践をスライドにまとめ、ポスターセッションとして交流を行った。

（４）ICTの活用方法に関する学習会・実践

普段の授業や学級活動・校務に生かせるICT活用能力の向上を目指し、加納岩小古屋達郎先生による教育DXと生成AIの活用についての講義や校内でのCanvaを利用したスライド作成や動画制作の実践を行った。

Ⅱ　成果と課題

１　成果

・　昨年度の研究主題を引き継いで子ども主体の授業づくりを考えたことで、多様な学びの環境を整えながら個別最適な学びと協働的な学びを実践でき、自分自身の指導観を時代に合わせて高めていく方向性がより明確になった。

・　若い先生方が増える職場において、学級づくりや授業づくりなど基礎的なことから互いに教えあい学び合える内容で、校内研修の場のみならず、日常的なOJTが随所で見られるようになっている。学びあえる教師集団に一歩近づいているのを感じた。

・　ブロック研修やポスターセッションを通して、他校や他学年の実践や資料を知り、指導者同士で探究的な学びの指導法について意見交換することで、自校の児童の様子との比較や自身の授業を見つめ直す機会となり、指導上の課題に対する多くのヒントを得ることができた。

２　課題

・　４つの講演会で得た学びを実践に生かすためには、内容を整理し振り返る時間の確保が必要である。来年度は講演後に自分事としてとらえて実践に結び付けるための計画の時間を設け、学びを授業改善につなげていきたい。

・　他の先生方の授業を気軽に見に行けるようなオープンな環境をつくり、負担の大きい指導案作成などを伴わずに短時間の参観を通して「子どものひきつけ方」や「声掛けのタイミング」などを学び合い、互いにその良さや日々の実践を認め合いながら自分の授業にすぐ生かせる場づくりがあるとよい。



Ⅲ　成果物　松里小2025校内研実践交流シート　　（研究主任　小池美樹）

井尻小学校

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

～個別最適な学びと協働的な学びの日常化～(3年目)

Ⅰ 研究の内容

1 研究の目標

(1)一人一台端末を基盤として、単元を通して学習者主体の視点を重点とする授業改善を目指し、児童が学習内容や学習形態を選択する学びを目指すことで、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善。

(2)学習を通して児童がどの場面でどのように変容したか、どんな学びの瞬間があったかなどの共有。

2 研究の具体的内容

(1)授業づくり・授業改善

ア 授業改善への強い意識と学ぶ楽しさ・考える楽しさを実感できる授業づくり

イ 子ども主体の授業づくりについての学習会

ウ 生成AIの活用にむけての学習会

エ リーディングDXについての学習会

オ 授業づくり特例校にむけての学習会

カ やってみて効果的だった指導の伝達

キ 一人一実践

・第1学年 輿石 晴美 教諭　　道徳科「きいろいベンチ」
・第2学年 前田　文　教諭　　国語科「かたかなで書くことば」
・第3学年 藤巻 周祐 教諭　　社会科「地域の安全を守る」
・第3学年 久保田 英樹教諭　　算数科「重さをはかって表そう」
・第4学年 天野 ねいろ教諭　　道徳科「友達が泣いている」
・第4学年 水上 由人 教諭　　国語科「工芸品のみりょくを伝えよう」
・第5学年 中村 美優 教諭　　社会科「日本の工業生産と今と未来」
・第5学年 髙野 育愛 教諭　　図画工作科「形に命をふきこんで」
・第6学年 中村 悦子 教諭　　道徳科「ブランコ乗りとピエロ」
・第6学年 中嶋 康雅 教諭　　理科「変わり続ける大地」

ク 全国学力・学習状況調査の分析

(2)学級づくり・集団作り

ア WebQ-Uや学校生活アンケートを参考にした学級集団作りや児童理解

イ 各学年の今後の対応策の共有化

Ⅱ 成果と課題

1 成果

・「子ども主体の授業づくりについての学習会」や「生成AIの活用にむけての学習会」また「リーディングDXについての学習会」を通して、個別最適な学びと共同的な学びをどのように日常に落としこむか具体的な道筋が見えた。
・やってみて効果的だった指導の伝達は、すぐに取り入れられそうなものや日々の授業に直結する具体的な工夫を多く知ることができ、大変有意義だった。
・一人一実践は、それぞれが学び合い、自分たちのスキルアップに繋がり、力量を高めるよい機会だった。また、共有することによって、授業者が気づかない児童の学びや変容など交流することもできた。授業者が様々なことを考えながら準備・実践を行うことが、授業者自身の力になっていくことを大切にしていきたい。
・Web-QU の結果の分析を少人数で行ったことで、より細かな視点から課題を捉えることができ、具体的な対応策を考えることができた。

2 課題

・ICT の活用についてはまだ課題も多く、どのような学習効果を期待して ICT を活用するのかを明確にする必要がある。また、ICT を活用した授業だけでなく、児童の実態に合わせた従来の学習方法を取り入れた多様な授業も考えていく必要がある。生成 AI の有効活用が今後必要になってくると思われる。
・少人数学級だからこそ生かせる指導方法を深め、個別最適な学びと協働的な学びをより効果的に両立させるための、具体的な指導方法の研究が必要である。
・一人一実践は、お互いに授業を見合う中で力量を高めるよい機会だが、参加体制や実施方法に課題が見られた。その後の振り返りや意見交換など、時間があまりとれなった。その際、授業内容の振り返りも大切だが、その学習を通して児童がどのような場面でどのように変容していったか、どんな気づきの瞬間があったかなどを共有できるとよい。

Ⅲ 成果物

1 学習会資料
2 一人一実践授業案及び実践のまとめ
3 Web-QU 対応策シート
4 全国学力・学習状況調査分析結果

（研究主任 輿石晴美）

勝沼小学校

子供主体の授業づくりを通した、児童の資質・能力の育成
～「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実と地域と連携した教育の実践を通して～

Ⅰ　研究内容

1　研究内容と方法

（1）研究内容

ア　子供主体の授業作りに向けての理論研究や学習会。

【全体研での理論研究・講師招聘による学習会】

イ　地域人材を活用しての子供主体の授業（生活科・総合的な学習の時間での授業）づくりに向けての論研究や学習会。

【全体研での理論研究・講師招聘による学習会】

ウ　「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現に向けた授業研究。

エ　甲州市「夢をかなえる学びのプロジェクト」と連携した研究。

（2）研究方法

ア　全体研究会と「社会科、総合の授業を中心とした子供主体の探求型の授業（高学年ブロック）」「地域人材を活用しての子供主体の授業（生活科・総合的な学習の時間　低学年ブロック研究）」のブロック研究で研究を進める。

イ　講師を招いての学習会開催や公開研究会への参加、校内でのICT活用研修、書籍などから理論研究を進める。

ウ　一人一実践の授業公開を行い、参観者の意見を授業改善に活かす。

エ　WEBQU、心の羅針盤を活用し児童の実態を把握し、具体的な支援策を検討する。

オ　甲州市「夢をかなえる学びのプロジェクト」講演会に積極的に参加したり、『Teacher's Note』から学んだりして、日々の実践に活かす。

2　具体的実践

（1）理論研究

ア「地域教材、地域人材を活用した低学年での授業作りについて」（7月4日）

講師 義務教育課　副主幹・指導主事 原田美貴先生

イ「個別最適な学びを進めていくための授業作りについて」（8月20日）

講師 総合教育センター 指導主事 飯窪優先生

ウ「理由なき不登校の理解と支援について」（11月17日）

講師 山梨大学大学院 准教授 田中健史朗先生

（2）WEBQUの分析・全国学力学習状況調査の分析

ア　WEBQUの分析をブロックに分かれて実施し、具体的な支援の方法を共有しアタックシートを作成した。

イ　全国学力学習状況調査の問題を職員全員で事前に解いた後、「児童はどんなところに難しさを感じた」「どんな指導が必要か」など、グループで討議し、プレゼン形式で共有した。

（３）授業実践

第１学年	廣瀬　尚子教諭	国語科	「じどう車ずかんをつくろう」
第２学年	佐藤　友紀教諭	音楽科	「おまつりの音楽」
第３学年	望月　彩海教諭	算数科	「数の表し方やしくみを調べよう」
第４学年	小川　壮太教諭	社会科	「信玄づつみを調べよう」
第５学年	中根　　淳教諭	社会科	「未来とつながる情報」
第６学年	高橋　里恵教諭	社会科	「幕府の政治と人々の暮らし」
こすもす	窪田真由美教諭	国語科	「こまを楽しむ」
たんぽぽ	塚田志小美教諭	自立活動	人間関係の構成
さくら	野尻あや子教諭	自立活動	構音指導
第４学年	志村　克人教諭	理科	「物のあたたまり方」
第６学年	木下里江子教諭	外国語科	「I want to go to Italy.」

Ⅱ　成果と課題

１　成果

（１）理論研究での学習会では、講義による一方的な知識の伝達にならないように、協議の時間を設けていただくように講師と調整したことで全員が主体的に学ぶ学習会となった。合理的配慮が必要な児童が多いため、児童支援、児童理解の学習会を行うことで児童理解を深めることができた。

（２）WEBQUの分析をブロックに分かれて実施し、具体的な支援の方法を共有しアタックシートを作成したことで、複数の視点から児童支援の方法を考えることができ、支援についてもチームで行うことができた。
全国学力学習状況調査の問題を職員全員で事前に解いた後、「児童はどんなところに難しさを感じた」「どんな指導が必要か」など、グループで討議し、プレゼン形式で共有した。双方向で学ぶことができる研究会となった。

（３）飯窪指導主事との学習会で紹介していただいた先進校の実践例をもとに、探求のサイクルを意識した授業形態を高学年の授業研究に取り入れることができた。また、原田指導主事との学習会では地域人材・教材について学校の資源として活用できそうなものをグループワークで考えた。その中から、２学期に３年生がワイン作りとぶどう祭りを学習課題として学びを深めた。「自分が学んだことをぶどう祭りに訪れた観光客へ紹介する」を学習のゴールに設定し、ぶどう祭り当日は大勢のお客さんの前で学んだことを発表することができた。

２　課題

・校内研に主体的に取り組めるよう、個々の先生方が主人公になるように役割を分担したり、グループワークを取り入れたりと双方向で学びが深まる校内研究を意識して行ってきた。しかし、研究授業ではどうしても授業者の先生に負担が偏ってしまった。また、先生方の学びたいニーズをとらえながら持続可能な校内研究を実施していく必要性を感じる。

Ⅲ　成果物

１　全国学力学習状況調査結果の分析結果

２　研究授業・一実践授業指導案　　（研究主任　中根淳）

祝小学校

自ら学び続ける祝っ子

―子どもの学び方を支援する手立てを通して―

Ⅰ　研究の内容

1　研究内容

（1）児童が自ら選択・決定し、探究に没入できる授業づくりの推進

ア　「わくわく」を引き出す学習課題と環境構成

・児童が「どうして？」と問いを抱くような資料提示の工夫を行い、主体的な課題設定を促す。

・児童自らが学び方や課題を選択・決定できる環境を整え、学習への没入を図る。

イ　探究のプロセスと単元設計の最適化

・「祝小スケール」を活用し、一斉指導・個別最適な学び・協働的な学びを織り交ぜた単元構成を行う。

・各教科の「見方・考え方」を働かせ、概念理解を伴う「深い学び」へとつなげる。

ウ　思考スキルとICTの活用

・思考ツール等を活用し、児童の思考を可視化・整理する。

・クラウド環境によるリアルタイムな進捗共有を行い、対話や議論を活性化させることで協働的な学びを加速させる。

（2）具体的な研究活動

ア　学校DX戦略アドバイザー（山梨大学准教授　三井一希先生）を招聘しての学習会及び授業観察とフィードバック

・「個別最適な学び・協働的な学びの授業デザイン」についての学習会

・学校DX戦略アドバイザーによる授業観察と指導助言

イ　研究授業及び一人一実践

①公開研究会（10月24日）

第1学年　国語科「じどう車くらべ」　菱澤　里美教諭

第4学年　算数科「およその数と使い方を調べよう」　天野　友理教諭

第5学年　社会科「未来を作り出す工業生産」　木野　裕太教諭

第6学年　道徳　「ブランコ乗りとピエロ」　赤荻　美弥教諭

ウ　甲州市「夢をかなえる学び」のプロジェクトとの連携

・教育講演会をうけた授業改善

・WEBQU の実施と分析・活用の充実

Ⅱ　成果と課題

〇成果

本年度は「ICT を学習基盤とする」という仮説のもと、FigJam や生成 AI などのデジタルツールを日常的に活用し、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実に向けた授業改善を推進した。特に、単元や本時のゴールを児童と共有し、「祝っ子探究スキル」や「はかせかいだん」を活用したことで、児童が自らの学びを見通し、主体的に取り組む姿が顕著に見られた。低学年においても、遊びの要素を取り入れた端末操作からスタートし、スムーズに各教科での活用へと繋げることができた。また、リーディング DX 公開授業では、複数の学年・教科で実践を公開し、外部への発信と校内での組織的な研鑽を両立させた。これにより、教職員が互いに学び合い、指導法をアップデートする文化が醸成された。また、特別支援学級においてもデジタル教科書等を活用した個に応じた支援を充実させることができた。授業以外でも、九九や英語等の検定活動を通した基礎学力の定着にも大きな成果を上げた。これらに加え、九九、英語、ことわざ等の各種検定活動が児童のモチベーションを支える土台となった。これらの反復学習が、基礎学力の定着につながり、自己肯定感も高まり、授業において、「学び続ける祝っ子」の原動力になっている。

●課題

児童が自ら課題を決定する「子ども主体の学び」の実現においては、依然として個人差が見られる。中でも、学習課題そのものを児童が選択・決定する場面に課題が見られた。今後は児童の知的好奇心をより一層引き出す導入の工夫や、既習事項と新たな課題を関連付ける手立てをさらに強化し、探究のプロセスの質を向上させる必要がある。また、「主体的・対話的で深い学び」の成果を客観的に示すためのデータ収集と分析についても継続的な検討が求められている。

さらに、基礎的な操作の個人差を埋めることや、生成 AI に対するリテラシー、情報の「整理・分析」の強化など、情報活用能力の育成も、今後の課題となっている。

Ⅲ成果物

・低・中・高学年別「祝っ子思考スキル」の掲示物

・祝っ子探究シート

・公開授業の指導案、一人一実践の指導案

祝小校内研サイト

（研究主任　天野　友理）

東雲小学校

「自ら課題を見つけ、進んで学習する児童の育成」
～「個別最適な学び」と「協働的な学び」の日常化を目指して～

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実と日常化を目指した授業改善を行うことで、「自ら課題を見つけ、進んで学習する児童」が育つのではないかと考える。

Ⅰ　研究の内容

1　学習会

ア　令和７年５月２８日

「自ら課題を見つけ、進んで学習する児童の育成」

～「個別最適な学び」と「協働的な学び」の日常化を目指して～

山梨県総合教育センター　有賀拓也　指導主事

イ　令和７年６月１８日

「Canva で変わる　授業と校務」

富士河口湖町立　勝山小学校　佐藤拓　先生

2　研究授業

令和７年１０月２９日（水）

第３・４学年　体育科「小型ハードル走のヒミツをさぐれ！」　三森美礼　教諭

指導助言　山梨県教育庁　保健体育課　上野裕城　指導主事

3　一人一実践

・第３学年　小林　淳子教諭　理科　「音のせいしつ」
・第１学年　水上　千春教諭　国語　「じどう車くらべ」
・第２学年　山内　要保教諭　算数　「かけ算　九九をつくろう」
・第３学年　渡邉　　皓教諭　算数　「分数を使った大きさの表し方を調べよう」
・第５学年　志村　和哉教諭　国語　「固有種が教えてくれたこと／自然環境を守るために」
・第６学年　岡村　澄人教諭　国語　「おすすめパンフレットを作ろう」
・ひまわり　深味　朝日教諭　算数　「新しい計算を考えよう」（２年）
・あおば　　渡邉満智子教諭　算数　「どんなけいさんになるのかな」（１年）

4　親和的な学級集団づくりの充実

・WEBQU の取り組み

・学級集団づくりアセスメント・対応策シート

5「夢をかなえる学びのプロジェクト」との関り

・WEBQU 検査と結果分析

・「甲州市ティーチャーズノート」の活用

6　家庭、地域、中学校ブロックとの連携、交流

・授業参観

・学校、学年だよりの活用

・中学校ブロックでの連携、交流、授業参観

Ⅱ　成果と課題

本年度は研究1年目として、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の理論共有と、学習者主体の授業づくりに向けた基盤整備に重点を置いた。外部講師による学習会を通して理論のアップデートを図るとともに、Canva 等の ICT 活用スキルを習得したことで、授業における表現や協働の選択肢を広げることができた。全職員が「まずはやってみる」という前向きな姿勢で研究授業や「一人一実践」に励み、実際の子供の姿を通して学び合えたことは、本校にとって大きな成果である。また、WEBQU 検査の結果を共有し、学級集団づくりに効果的に活用したことは、学習者主体の学びを支える土台を強固なものとした。

課題として、今後は、これらの実践を特別なものとせず、いかに「日常化」させていくかが鍵となる。単元設計の視点から、子供が自ら学びを調整する姿を日常の風景とするべく、研究の歩みを深めていきたい。

Ⅲ　成果物

・研究授業指導案

・一人一実践指導案

・学習会資料

（研究主任　水上　千春）

菱山小学校

主体的に表現する児童の育成
～個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指して～

「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を行うことで、「主体的に学び、表現する児童」が育つのではないかと考える。自分の思いや考えに目的意識をもって表現するために必要な資質・能力を育てていきたいと考える。

Ⅰ　研究の具体的な内容と方法

1　「主体的に学び、表現する児童」リーディングDX授業公開への参加

先進的な授業実践から学び、自身の授業改善へと繋げていった。

2　児童の実態調査

言語活動に対する意識についてのアンケートを１学期と２学期の２回実施し、実態と変容を把握することで指導に生かした。

3　授業実践

一人一実践

第１学年	国語	「せつめいする文しょうをよもう」	教諭　大島めぐみ
第２学年	算数	「かけ算（２）九九をつくろう」	教諭　金井　京子
第４学年	算数	「直線の交わり方やならび方に注目して調べよう」	教諭　名取智枝子
第５学年	社会	「未来をつくりだす工業生産」	教諭　内田絵里奈
第６学年	算数	「データを活用して生活を見直そう」	教諭　武井　尚輝

4　基礎基本の定着に関わる取組

・計算３分間チャレンジ

5　甲州市「確かな学力」育成プロジェクトとの連携

（１）学級集団づくり

ＷＥＢＱＵ調査を生かした児童理解と学級集団づくりへの取り組み

（２）あいさつ、学習規律

登下校時の職員室へのあいさつ、児童会を中心とした「あいさつ運動」

（３）授業づくり

ティーチャーズノートの活用

（４）家庭との連携

「家庭教育/子育てＱ＆Ａ」「家庭学習の手引き」の活用
ＧＩＧＡワークブックの活用

Ⅱ　成果と課題

1 成果

・組織的な集団づくりと多角的な支援の実現
WebQUの活用とブロック制の導入により、個々の担任が抱え込まず学校全体で情報を共有・分析しながら客観的な視点で児童を支援することができた。

・ICT活用による自律的な学習スタイルの定着
「一人一実践」やDX公開授業への参加を通じ、児童が状況に応じて学習課題や手法を選択する姿が見られるなど、個別最適な学びと協働的な学びを一体とした授業改善が進んだ。

・全校体制による授業改善サイクルの確立
教科を限定しない授業公開や事後の研究会により、学年を超えた指導のつながりや多様なアプローチを共有でき、教員の指導力向上につながった。

・甲州市の教育理念との一貫性を持たせた教育活動の展開
甲州市の「夢をかなえる学びのプロジェクト」と校内研究の方向性を揃えることで取り組みの意義が明確になり、一貫性のある教育活動が展開された。

・掲示や紹介による家庭学習への意欲喚起
階段への掲示や学級内での好事例の紹介を通じて、児童が互いのまとめ方や着眼点に刺激を受ける機会を作り、学習意欲の向上につなげることができた。

2 課題

・「探究的な学び」への応用と質の向上
定着しつつある学習スタイルを基盤として、児童自らが「問い」を深め、解決へと導く探究的な学びのプロセスをどのように構築していくかが次なる課題である。

・読書習慣の定着と時間の確保
特に高学年において読書時間の確保が難しく習慣化に至らなかったため、隙間時間の活用や教師によるブックトーク等、日常的に本に触れる環境設定が求められる。

・家庭・地域との連携による学びの環境づくり
読書活動や家庭学習の充実において、保護者の理解と協力を得ながら、学校外でも主体的に学ぶ姿勢を育むための具体的なアクションを推進していく必要がある。

Ⅲ　成果物

1　一人一実践の指導案
2　児童の学習活動に対する意識調査
3　勝沼地区ブロック交流研究会提案資料

（研究主任　内田　絵里奈）

大和小学校

主体的に学ぶ児童の育成

～個別最適な学びと協働的な学びを取り入れた授業づくり～

Ⅰ　研究の内容

１．みんなが安心して学べる学級づくり・集団づくり

（１）WEBQU 調査の分析と対策

全職員による WEBQU の分析と対策

２．子供主体の授業づくり

（１）学習会

「夢をかなえる学びのプロジェクト」子供主体の授業づくり

講師：甲州市教育委員会教育総務課　金森　淳　指導主事

（２）研究授業及び研究会

・第３学年　総合的な学習の時間

「わたしたちの大和」～甲州鞍馬石博士になろう～

授業者：中村　伸也　教諭

・第６学年　道徳科「あの夏の群上おどり」

授業者：塩澤　美希　教諭

（３）DX 指定校公開授業参加

Ⅱ　成果と課題

１．学級づくり・集団づくりに関わって

WEBQU 調査の実施と、その結果に基づく全教職員での分析・共有により、組織的な児童支援の基盤を築くことができた。「全教職員が担任である」という共通意識を持ち、担任だけでなく、全教職員で学級の実態や個々の児童の困り感を客観的に把握することで、学校全体で多面的な視点から児童を見守ることができた。共通理解の下で一貫した声掛けや支援の結果、安心して学べる雰囲気が醸成されるなど、児童の姿に肯定的な変容が見られるようになった。

２．授業づくりに関わって

（１）学習会

甲州市指導主事　金森淳先生を招聘し、甲州市「夢をかなえる学びのプロジェクト」についてご教授いただいた。甲州市「夢をかなえる学びのプロジェクト」のビジョンや、「個別最適な学び」「協働的な学び」の本質について、年度の早い時期に学習会を行うことで、他市町村から転入した教職員や現場復帰した教職員も含め、全職員が共通理解を持って研究を始めることができた。また、具体的な方法を学んだことで、校内研究を進める上での大きな指針とすることができた。今後、本校の児童の実態や少人数校の特性に合わせ、無理なく継続できる「大和小学校オリジナル」の形を模索していけると良い。

（２）研究授業及び研究会

探究学習と地域素材を組み合わせた授業づくりは、児童の「主体的に学ぶ姿」を引き出す大きな力となった。

低学年研究授業では、「甲州鞍馬石」を題材とし、実体験や地域の方との交流を取り入れた。これにより、児童は単元を通して、主体的に学習を進めることができた。さらに、ルーブリック「やまと探究シート」を活用し、児童自らが学習の到達点や自己の変容を確認できる手立てを講じたことで、「自らの学びを調整する姿」が見られたことは大きな成果である。

高学年研究授業では、地域の伝統である「勝頼公太鼓」を題材とした。自分たちが大切にしている伝統を、実感を伴う「自分事」として捉えることで、主体的に自分の考えをアウトプットする姿が見られた。また、探究学習において、「見方・考え方」を適切に示したことで、多面的な思考が引き出され、深い学びへとつながった。

今後は、意見の共有方法を工夫したり、各教科における「見方・考え方」をより分かりやすく示したりする中で、児童が自ら「問い」を見つける授業づくりを目指していきたい。

（３）DX 指定校公開授業参加

先進校の実践に触れたことは、研究を進める上で、新たな視点を得る貴重な機会であった。各教科における探究学習の進め方、学校独自の取り組み等、研究授業だけでなく日々の授業を改善する大きなヒントとなった。

Ⅲ　成果物

・子供主体の授業づくりに向けた研究授業指導案
・やまと探究シート

（研究主任　青木　恵）